

平成20年度
安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書

八ツ口遺跡・三枚橋遺跡

2010.3

安曇野市教育委員会

平成20年度
安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書
八ツ口遺跡・三枚橋遺跡

2010. 3

安曇野市教育委員会



ハツロ遺跡（東から）



三枚橋遺跡（南から）

序

平成20年度には安曇野市内で発掘調査2件、試掘調査9件、工事立
会調査23件、慎重工事5件の埋蔵文化財保護措置が実施されました。
埋蔵文化財は、安曇野の地に暮らした先人たちのかけがえのない生き
た証であると同時に、一旦失ったら取り戻すことのできない、現代に
生きる私たちの財産でもあります。この地下に埋もれた文化財を掘り
出し、光をあてることが安曇野市教育委員会としての重要な使命のひ
とつです。

本書に掲載した2件の発掘調査は、いずれも民間開発に伴う記録保
存であり、事業主はじめ関係者諸氏には多大なる御配慮を賜りました。
集合住宅建設に伴うハツ口遺跡発掘調査では古代のハツ口集落の一端
をつかめたと同時に、中世の堅穴状遺構や石臼埋納遺構が確認されま
した。また、店舗建設に伴う三枚橋遺跡発掘調査では8世紀後半に比
定される大型の堅穴建物跡の入り口と考えられる場所から階段状の施
設を確認しています。これらの調査成果が、今後多くの市民に活用さ
れ、広く安曇野の歴史・文化の解明に役立つことを期待します。

最後になりましたが、調査にご協力くださいました全ての関係機関、
関係諸氏に厚く御礼申し上げ、序とさせていただきます。

平成22（2010）年3月

安曇野市教育委員会
教育長 丸山 武人

例 言

- 1 本書は長野県安曇野市において平成20年度に安曇野市教育委員会が実施した埋蔵文化財保護事業および発掘調査の報告書である。
- 2 平成20年度に実施した発掘調査は本書に掲載した2件であり、遺跡名称および所在地・調査期間・調査面積は以下のとおりである。

ハツ口遺跡（第2次）	長野県安曇野市穂高1386番地 外
	平成20年5月27日～6月30日 750㎡
三枚橋遺跡（第6次）	長野県安曇野市穂高1766番地1 外
	平成20年7月22日～8月31日 700㎡
- 3 本書掲載の発掘調査2件は、安曇野市教育委員会が実施し、開発事業者が費用負担した。
- 4 本書の編集は安曇野市教育委員会事務局が行った。掲載した石器・石製品の石材肉眼鑑定は森義直氏に依頼し、執筆は土屋和章が担当した。
- 5 本書で使用した主な引用・参考文献は本文末に一括して掲載した。
- 6 本調査に関する事務書類および出土遺物・記録類は安曇野市教育委員会が保管している。
- 7 調査全般にわたり以下の方々、ならびに機関からご指導・ご協力いただきました。記して感謝いたします。（敬称略・五十音順）
大澤 哲、太田 圭郁、桐原 健、島田 哲男、森 義直、堀 久士、山下 泰永、山田 真一
- 8 本書掲載のハツ口遺跡発掘調査にかかる費用は深澤新治氏、三枚橋遺跡発掘調査にかかる費用は有限会社弥栄商會に負担していただきました。調査に際して地域の埋蔵文化財保護へのご理解とご協力賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

凡 例

- 1 発掘調査および整理作業に際して、遺跡略号として遺跡名のアルファベットと調査年度（西暦2008年）の組み合わせである次の表記を使用した。
ハツ口遺跡（第2次）：YK08 三枚橋遺跡（第6次）：SMB08
- 2 調査及び本書での遺構名は、長野県埋蔵文化財センター（長野県埋蔵文化財センター1987）に従い次の略号を使用している。
SB：堅穴住居跡・堅穴状遺構 SD：溝跡 SF：焼土遺構 SK：土坑 ST：掘立柱建物跡
P：ピット
- 3 本書実測図で遺物は次のように表現した。
土師器：断面無地 須恵器：断面黒塗 灰釉陶器：断面トーン
黒色処理：トーン（薄） 赤彩：トーン（濃）
- 4 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。

目 次

序

例言・凡例

目次・図表目録

第1章 平成20年度埋蔵文化財保護事業	1
1 埋蔵文化財保護事業の概要	1
2 発掘調査	1
3 試掘調査	4
第2章 ハツ口遺跡	9
1 調査の契機と経過	9
2 遺跡の位置と環境	10
3 調査の方法	11
4 遺構	13
5 遺物	19
写真図版	25
第3章 三枚橋遺跡	29
1 調査の契機と経過	29
2 遺跡の位置と環境	30
3 調査の方法	31
4 遺構	33
5 遺物	42
写真図版	46
第4章 平成20年度発掘調査の総括	49
付表	51
報告書抄録	

図表目録

第1章 平成20年度埋蔵文化財保護事業

- 第1図 平成20年度発掘調査等位置図
- 第2図 三枚橋遺跡試掘位置図
- 第3図 ハツ口遺跡試掘位置図
- 第4図 上郷遺跡試掘位置図
- 第5図 北才の神遺跡試掘位置図
- 第6図 塩田若宮遺跡試掘位置図
- 第7図 宮脇遺跡試掘位置図
- 第8図 潮神明宮前遺跡試掘位置図
- 第9図 他谷遺跡試掘位置図
- 第10図 穂高古墳群 B24試掘位置図

第2章 ハツ口遺跡

- 第11図 発掘調査位置図
- 第12図 ハツ口遺跡西壁土層
- 第13図 調査区全体図
- 第14図 SB1 実測図
- 第15図 SB2 実測図
- 第16図 SB3 実測図
- 第17図 SB4 実測図
- 第18図 SB5 実測図
- 第19図 SB7 実測図
- 第20図 SB6 実測図
- 第21図 SK1 実測図
- 第22図 SB2・SB3 出土遺物実測図
- 第23図 SB4・SB5 出土遺物実測図
- 第24図 SB7 出土遺物実測図
- 第25図 遺構外出土遺物実測図
- 第26図 試掘調査出土遺物実測図
- 第27図 石製品・金属製品実測図

第3章 三枚橋遺跡

- 第28図 発掘調査位置図
 - 第29図 三枚橋遺跡北壁土層
 - 第30図 調査区全体図
 - 第31図 SB1 実測図
 - 第32図 SB2 実測図
 - 第33図 SB3 実測図
 - 第34図 SB4 実測図
 - 第35図 SB5 実測図
 - 第36図 ST1 実測図
 - 第37図 ST2 実測図
 - 第38図 ST3 実測図
 - 第39図 ST4 実測図
 - 第40図 SB1・SB2 出土遺物実測図
 - 第41図 SB3 出土遺物実測図
 - 第42図 SB4・SB5 出土遺物実測図
 - 第43図 遺構外出土遺物実測図
-
- 第1表 平成20年度発掘調査等一覧
 - 第2表 時期設定
 - 付表1 ハツ口遺跡建物跡観察表
 - 付表2 ハツ口遺跡出土土器観察表
 - 付表3 ハツ口遺跡出土石製品観察表
 - 付表4 ハツ口遺跡出土金属製品観察表
 - 付表5 三枚橋遺跡建物跡観察表
 - 付表6 三枚橋遺跡出土土器観察表
 - 付表7 三枚橋遺跡出土石製品観察表

第1章 平成20年度埋蔵文化財保護事業

1 埋蔵文化財保護事業の概要

調査体制

平成20年度の安曇野市における埋蔵文化財保護事業は、組織改変にともない新設された文化課文化財保護係が担った。体制は次のとおりである。

事務局 安曇野市教育委員会事務局 文化課

高原 正文（文化課長）、那須野 雅好（文化財保護係長）、土屋 和章（文化財保護係）

概要

平成20年度の安曇野市における埋蔵文化財保護事業の一覧は第1表のとおりである。発掘調査等は合計39件で内訳は発掘調査2件、試掘調査9件、工事立会調査23件、慎重工事5件であった。それぞれの位置は第1図に示す。試掘調査の概要は第3項で取り上げた。なお、平成20年度の工事立会調査および慎重工事で埋蔵文化財に影響を与えた件はない。

2 発掘調査

平成20年度発掘調査を実施した2件の遺跡における調査記録を示す。

ハツ口遺跡

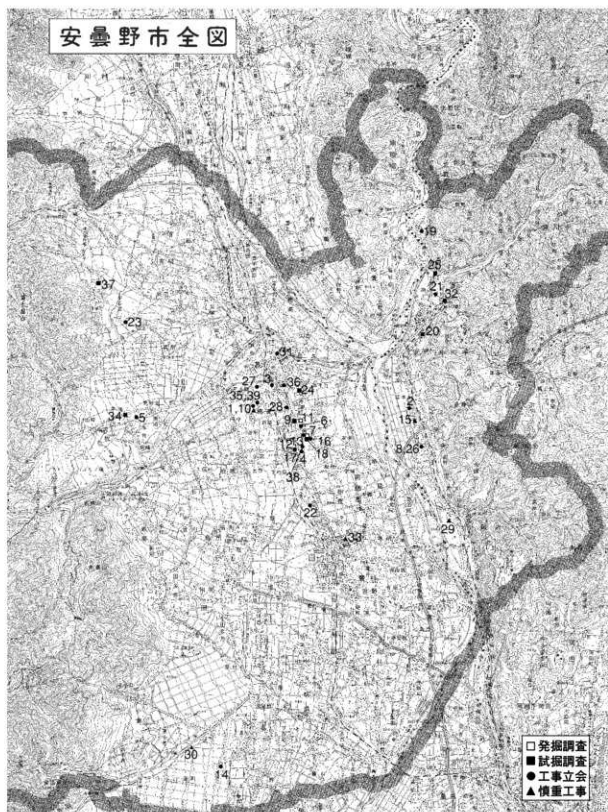
次数	調査年	面積	内 容	調査主体	備 考
1	平成6年	1,200㎡	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、八稜鏡、緑軸陶器ほか	穂高町教育委員会	店舗
2	平成20年	750㎡	竪穴建物跡、竪穴状遺構ほか	安曇野市教育委員会	集合住宅

三枚橋遺跡

次数	調査年	面積	内 容	調査主体	備 考
1	平成3年	700㎡	竪穴住居跡ほか	穂高町教育委員会	店舗
2	平成7～8年	800㎡	竪穴住居跡、掘立柱建物跡ほか	穂高町教育委員会	店舗
3	平成13年	1,100㎡	竪穴住居跡、掘立柱建物跡ほか	穂高町教育委員会	店舗
4	平成14年	1,100㎡	竪穴住居跡、掘立柱建物跡ほか	穂高町教育委員会	店舗
5	平成19年	2,013㎡	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、縄文晩期土器ほか	安曇野市教育委員会	公共施設
6	平成20年	700㎡	竪穴住居跡、掘立柱建物跡ほか	安曇野市教育委員会	店舗

第1表 平成20年度発掘調査等一覧

NO	調査	遺跡	所在地	調査期間	工事目的等
● 1	立会	宗徳寺遺跡	穂高9353番地	20080401～20080401	宅地造成
● 2	立会	給然寺古屋敷遺跡	明科中川手112番地4外	20080408～20080408	個人住宅
● 3	立会	穂高神社境内遺跡	穂高6079番地	20080407～20080411	拝殿改築
● 4	立会	中在遺跡	穂高791番地3外	20080430～20080430	駐車場
● 5	立会	他谷遺跡	穂高牧980番地3	20080501～20080501	個人住宅
● 6	立会	三枚橋遺跡	穂高1483番地外	20080520～20080613	店舗
□ 7	発掘	ハッ口遺跡	穂高1386番地外	20080527～20080630	集合住宅
● 8	立会	中条遺跡	明科光833番地3外	20080701～20080701	倉庫
■ 9	試掘	三枚橋遺跡	穂高1796番地3外	20080818～20080818	店舗
▲ 10	慎重工事	宗徳寺遺跡	穂高9353番地	20080820～20080820	個人住宅
□ 11	発掘	三枚橋遺跡	穂高1766番地1外	20080722～20080831	店舗
● 12	立会	矢原権現地遺跡	穂高柏原940番地1	20080904～20080904	店舗併用住宅
● 13	立会	ハッ口遺跡	穂高1385番地2外	20080904～20080904	個人住宅
● 14	立会	長尾城址北遺跡	三郷温4388番地1	20080908～20080908	農業用倉庫
▲ 15	慎重工事	北村遺跡	明科光144番地	20080910～20080910	中古車置き場
● 16	立会	矢原五輪畑遺跡	穂高1347番地3	20080925～20080925	個人住宅
● 17	立会	四反田遺跡	穂高柏原922番地1	20081003～20081003	個人住宅
■ 18	試掘	ハッ口遺跡	穂高1378番地1	20081003～20081003	店舗
● 19	立会	上生野遺跡	明科東川手13805番地1	20081009～20081009	携帯電話アンテナ
■ 20	試掘	上郷遺跡	明科中川手3300番地1外	20081015～20081015	社会就労センター
● 21	立会	新屋遺跡	明科東川手645番地2	20081016～20081016	個人住宅
● 22	立会	正覚院跡	豊科南穂高3724番地3先外	20081027～20081027	公共下水道
● 23	立会	小岩塚下木戸遺跡	穂高有明3113番地1先外	20081112～20081112	公共下水道
■ 24	試掘	北才の神遺跡	穂高2753番地2先外	20081117～20081212	道路改良
■ 25	試掘	塩田若宮遺跡	明科東川手867番地1外	20081215～20081215	仮保育園舎
● 26	立会	中条遺跡	明科光833番地3外	20090108～20090108	工場
■ 27	試掘	宮脇遺跡	穂高6141番地2外	20090113～20090115	土地区画整理
● 28	立会	藤塚遺跡	穂高6809番地1	20090120～20090120	個人住宅
▲ 29	慎重工事	小瀬幅遺跡	豊科田沢4875番地1	20090123～20090123	法面保護工
▲ 30	慎重工事	黒沢川右岸遺跡	三郷小倉4133番地3外	20090204～20090204	店舗
● 31	立会	等々力町巾上巾下遺跡	穂高4893番地1外	20090210～20090210	店舗
■ 32	試掘	橋ノ爪遺跡	明科東川手621番地外	20090227～20090227	個人住宅
▲ 33	慎重工事	法蔵寺館跡	豊科5719番地	20090227～20090227	公衆トイレ
■ 34	試掘	他谷遺跡	穂高牧942番地3外	20090316～20090316	水路改修
● 35	立会	宗徳寺遺跡	穂高7137番地4	20090316～20090316	本堂建設
● 36	立会	穂高神社境内遺跡	穂高2671番地2外	20090316～20090316	歩道設置
■ 37	試掘	穂高古墳群 B24	穂高有明2186番地96	20090318～20090319	個人住宅
● 38	立会	四反田遺跡	穂高803番地20外	20090323～20090323	歩道設置
● 39	立会	宗徳寺遺跡	穂高7137番地4	20090326～20090326	本堂建設(浸透マス)



第1図 平成20年度発掘調査等位置図 (1/100,000)

3 試掘調査

三枚橋遺跡 (第1表9)

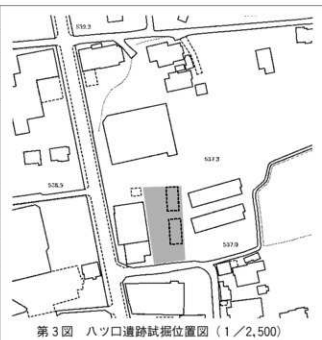
所在地	安曇野市穂高1796番地3外
調査期間	平成20年8月18日
調査面積	40㎡
調査契機	店舗建設
概要	店舗建設予定地に5箇所のトレンチを設定し、遺構・遺物の検出を試みた。土層は表土下に150cm以上暗褐色砂質シルト層が堆積している。調査の結果、耕作土およびその下層から少量の須恵器・土師器の微小破片が少量出土したが、遺構は確認されなかった。調査地は厚いシルトの層であるため更に下位に埋蔵文化財が存在する可能性はあるが、今回の店舗建設で影響を受ける深度でないため地表下150cm以下の調査は実施していない。



第2図 三枚橋遺跡試掘位置図 (1/2,500)

ハツ口遺跡 (第1表18)

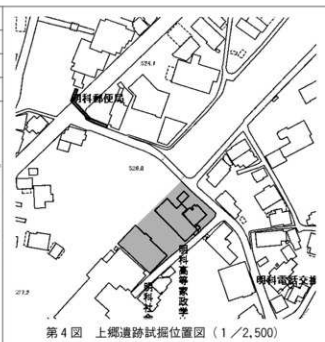
所在地	安曇野市穂高1378番地1
調査期間	平成20年10月3日
調査面積	14㎡
調査契機	店舗建設
概要	店舗建設予定地に1m×2mの調査区を7箇所設定し、遺構・遺物の検出を試みた。調査地はハツ口遺跡第1次発掘調査地点の隣接地であるため埋蔵文化財の存在が予測されたが、ごく少量の須恵器・土師器小片が出土したのみで、遺構等は確認されなかった。ただし、今回の試掘調査は既存構築物を避けての部分的なものであり調査面積も狭いため、開発に際しては工事立会等の保護措置を実施する必要がある。



第3図 ハツ口遺跡試掘位置図 (1/2,500)

上郷遺跡 (第1表20)

所在地	安曇野市明科中川手3300番地1外
調査期間	平成20年10月15日
調査面積	20㎡
調査契機	社会就労センター建設
概要	安曇野市明科社会就労センター建設予定地にトレンチを4箇所設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、地表下約100cmの2層でごく少量の土器微細破片が確認されたが、これに伴う遺構およびさらなる遺物は確認できなかった。土層は地表下約200cmまで暗オリーブ灰色の粘土層で4つの層に分けられ、いずれの層もしまり・粘性ともに強い。また、地表下200cm以深は礫層であった。



第4図 上郷遺跡試掘位置図 (1/2,500)

北才の神遺跡 (第1表24)

所在地	安曇野市穂高2753番地2先外
調査期間	平成20年11月17日～12月12日
調査面積	20㎡
調査契機	道路建設
概要	道路建設予定地にトレンチを南北に1箇所ずつ設定し、遺構・遺物の検出を試みた。その結果、北側のトレンチで地表下約50cm付近で砂質シルト層が確認されたが、遺構・遺物は確認されなかった。土層は地表下60cmまでで3つの層に分けられ、2層・3層からは少量の炭化物が確認された。このことから、今回試掘調査地の周辺に遺構等が存在する可能性がある。



第5図 北才の神遺跡試掘位置図 (1/2,500)

塩田若宮遺跡 (第1表25)

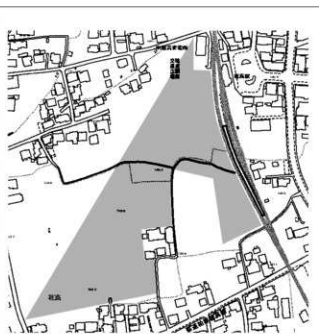
所在地	安曇野市明科東川手867番地1外
調査期間	平成20年12月15日
調査面積	20㎡
調査契機	保育園仮園舎建設
概要	<p>保育園仮園舎建設予定地にトレンチを設定し、遺構・遺物の検出を試みた。調査地は従前、学校用地、老人集会施設などに使用されたため、地表下約70cmまででは建物基礎の残骸などが見られる。これより下層の地表下約90cm付近には砂質シルトの堆積があり、この中に堅穴建物跡と考えられる掘り込みが確認できた。また、この遺構から回転糸切り痕跡のある土師器坏底部が出土した。今回の仮園舎は掘削の浅い仮設建物であるため、埋蔵文化財に影響はないと考えられるが、今後の開発には留意する必要がある。</p>



第6図 塩田若宮遺跡試掘位置図 (1/2,500)

宮脇遺跡 (第1表27)

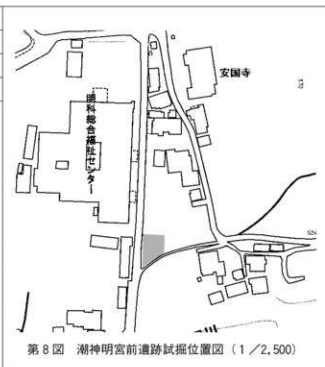
所在地	安曇野市穂高6141番地2外
調査期間	平成21年1月13日～1月15日
調査面積	180㎡
調査契機	土地区画整理
概要	<p>土地区画整理予定地のうち道路予定範囲にトレンチを23箇所(A～W)設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、土地区画整理予定地内の最南列のJトレンチ2層から黒色土器Aの底部破片が出土した以外は遺構・遺物ともに確認されていない。また、予定地内北側に位置するVトレンチ堆積層には少量の炭化物が混入していた。この結果、道路建設による、埋蔵文化財への影響はないと考えられるが、今後予定される宅地開発等には留意する必要がある。</p>



第7図 宮脇遺跡試掘位置図 (1/5,000)

しんめいのみくすまき しのつゆ
潮 神明宮前遺跡（橋ノ爪遺跡）（第1表32）

所在地	安曇野市明科東川手621番地外
調査期間	平成21年2月27日
調査面積	10㎡
調査契機	個人住宅建設
概要	個人住宅建設予定地にトレンチを設定し、遺構・遺物の検出を試みた。今回の調査地は過去に本調査が実施された地点の隣接地にあたり、住宅建設に伴う掘削で影響を受けると予想された約80cmを掘削して3つの堆積層を確認した。この結果、地表下約70cmで黒褐色粘土質シルト層（3層）が確認されたが、遺構・遺物は確認されなかった。したがって今回の個人住宅建設で埋蔵文化財への影響はないと考えられるが、今後近隣で予定される開発等には留意する必要がある。



第8図 潮神明宮前遺跡試掘位置図（1/2,500）

たが
他谷遺跡（第1表34）

所在地	安曇野市穂高牧942番地3外
調査期間	平成21年3月16日
調査面積	110㎡
調査契機	農業関連事業（水路改修）
概要	水路改修工予定地を試掘し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、堆積層は2つの層に分けられ、地表下約50cmまでの1層は道路舗装・整地層、下50～100cmの2層は若干黒色ブロックの混じる黄褐色ローム層であった。今回の調査地は過去に本調査が実施された地点の隣接地にあたり、縄文中期集落跡および中世の遺構が確認される可能性があったが、遺構・遺物は確認されなかった。したがって今回の水路改修で埋蔵文化財への影響はないと考えられるが、今後近隣で予定される開発等には留意する必要がある。



第9図 他谷遺跡試掘位置図（1/2,500）

穂高古墳群 B24 (第1表37)

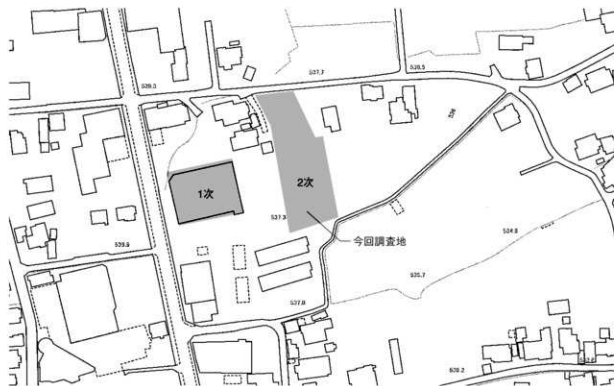
所在地	安曇野市穂高有明2186番地96	
調査期間	平成21年3月18日～3月19日	
調査面積	12㎡	
調査契機	個人住宅建設	
概要	<p>個人住宅建設予定地に2m×2mの調査区を3箇所設定し、遺構・遺物の検出を試みた。住宅建設箇所が古墳の前庭部付近にかかると考えられたため、当初は関連施設の存在が予測されたが、調査の結果古墳に関わる遺構等は確認されなかった。遺物は表土から須恵器小破片1点、繊維土器破片1点が出土した。</p>	
		<p>第10図 穂高古墳群 B24試掘位置図 (1/2,500)</p>

第2章 やつくち ハツ口遺跡

1 調査の契機と経過

調査の契機と経過

この調査は民間の集合住宅建設にかかる緊急発掘調査で、事業主体者は深澤新治氏である。集合住宅建設については平成19年度中に事業主体者から相談があり、これを受けて安曇野市教育委員会と事業主体者として埋蔵文化財保護協議を開始した。事業計画が具体化する中で、平成20年1月15日付け「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」（文化財保護法第93条第1項）が事業主体者から提出され、2月5日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」の通知が長野県教育委員会教育長からあった。3月4日には遺構・遺物の存否・深度を確認する目的で試掘調査を実施し、計画地に遺構・遺物が良好に残存していることが確認された。このため市教育委員会は事業主体者と再度保護協議をもち、集合住宅建設に先立って発掘調査を実施し記録保存を図ることで合意して、5月22日付けで安曇野市長を受託者、安曇野市教育委員会を調査担当者とする埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。発掘調査は平成20年5月27日から6月30日にかけて実施し、整理事業は現場調査終了時から平成21年3月31日まで断続的に継続した。



第11図 発掘調査位置図（1/2,500）

調査体制

調査主体 安曇野市教育委員会

調査担当者 土屋 和章（文化財保護係）

作業参加者 有沢 芳明、小穴 光司、勝野 辰雄、小松 繁幸、細尾 みよ子、本田 富保、
松田 洋輔、矢花 俊文

事務局 安曇野市教育委員会事務局 文化課

高原 正文（文化課長）、耶須野 雅好（文化財保護係長）、土屋 和章（文化財保護係）

調査日誌抄

平成20年

5月27日(火) 検出面設定の後、重機にて表土 除去開始。	6月10日(火) SB1～3、SK1精査。
5月28日(水) 表土除去。	6月11日(水) SB2～3、SK1～2精査。
5月29日(木) 雨天中止。	6月12日(木) SB2～6精査。
5月30日(金) 表土除去。	6月13日(金) SB2～7精査。
6月2日(月) 表土除去。作業員による遺構検 出開始。	6月16日(月) SB4～7精査。
6月3日(火) 雨天中止。	6月17日(火) SB5～7精査。
6月4日(水) 表土除去終了。遺構検出。	6月18日(水) SB5～7精査。
6月5日(木) SB1～2、SK1精査。	6月19日(木)～20(金) 作業中止。
6月6日(金) SB1～2、SK1精査。	6月23日(月) 清掃、空撮。
6月9日(月) SB1～2、SK1精査。	6月24日(火) 測量。
	6月25日(水) 測量。
	6月26日(木)～30日(月) 撤収、現場引渡し。

2 遺跡の位置と環境

地理的環境

ハツ口遺跡の所在する安曇野市穂高^{おびろ}矢原^{やばら}地籍は松本盆地の中ほどに位置し、西は飛騨山地、東は筑摩山地と接する。本遺跡付近は梓川^{あづまがわ}（犀川^{さいがわ}）水系の堆積物の上に西の飛騨山地から東流する烏川によって形成された扇状地の扇端付近に位置し、標高は537m前後である。現在の扇状地は須砂^{すな}渡^{わた}付近を扇頂として穂高市街地方面へ広がっており、完新世（沖積世）のものである。

現扇状地面上を流れる河川は歴史的に流路が一定しておらず、今回の発掘調査面は過去の豪雨などに洗い出された細粒のシルト質などの堆積物が凹地をレンズ上に埋めて形成されている。調査地点は西から東に低くなる緩斜面のうちでも尾根状に張り出した微高地になっており、両脇の谷地形からみて比高がある。調査区内北側にはNW-SE方向にシルト層を切る形で流路跡が観察された。この流路を切って平安時代の遺構が構築されており、流路の年代はこの遺構年代に先行するといえる。

歴史的環境

ハツコ遺跡の所在する安曇野市穂高矢原地籍は矢原遺跡群として『倭名類聚抄』にある安曇郡矢原郷、平安時代後期の矢原御厨に比定されている地域である。この地域では過去の発掘調査により縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が確認されている。安曇野市発足後の平成19年に実施した、矢原遺跡群に属する三枚橋・藤塚遺跡発掘調査では、奈良・平安時代を中心とする竪穴建物跡が25棟確認された（安曇野市教育委員会2009）。

今回の調査はハツコ遺跡第2次発掘調査にあたり、調査地点は安曇野市穂高1386番地外に所在する。この地は、開発計画が具体化するまで水田として使用されており、遺構等の残存状況は良好であった。過去には西隣する店舗建設に先立つ発掘調査によって古代の集落が確認されていた場所であり、今回調査地でもこの集落の一部が確認されたことになる。なお、調査地点に南接する現流路付近における過去の試掘調査などから、今回調査地の南には遺構等がほとんど存在せず、厚いシルト層と河川流路の礫層が入り混じった土層であることがわかっている。

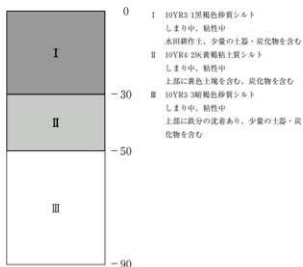
3 調査の方法

試掘調査

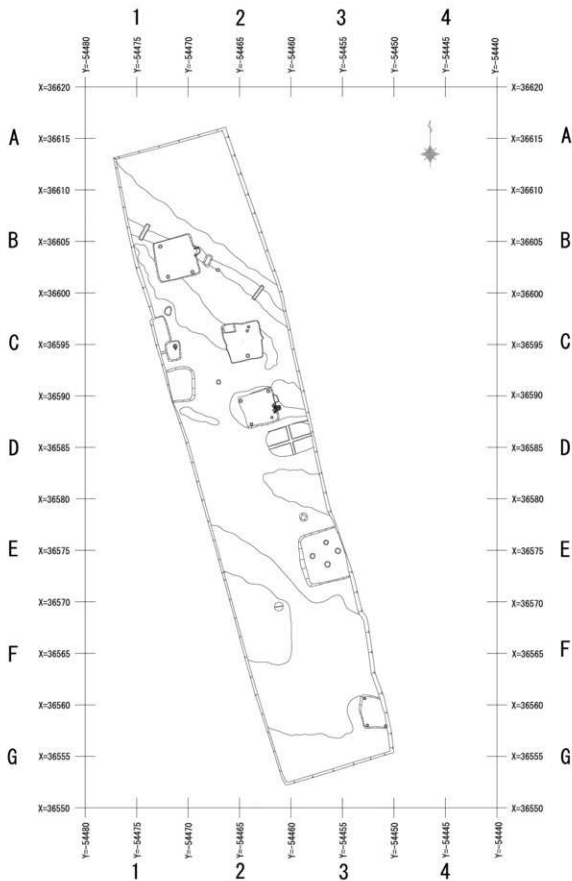
前述のとおり、平成20年3月4日に実施した試掘調査では幅約1m、総延長約65mのトレンチを設定して遺構面の確認を行った。この結果、現地表下約50cmのⅢ層から遺構が検出され、須臾器・土師器・灰軸陶器・弥生土器が出土した。

発掘調査

試掘調査の結果、調査区中ほどで遺構・遺物ともに密度が高いものの調査区内南側でも少量の遺物出土が確認されたため、集合住宅建設で影響をうける範囲全体を調査区として設定し表土除去を行った。調査面積は約750㎡である。発掘調査に際しては調査区全体に10mグリッドを設定し、表土除去については遺構検出面まで重機を使用した。遺構精査は、竪穴建物跡に関して基本的に4分割、その他の遺構については2分割して掘り下げを実施した。遺構測量については、基本的に業者委託としたが必要に応じて20分の1、10分の1の縮尺で実測図を作成した。記録写真としては主として35mmフィルムカメラを使用し、補助的にデジタルカメラを併用した。



第12図 ハツコ遺跡西壁土層



第13図 調査区全体図 (1/350)

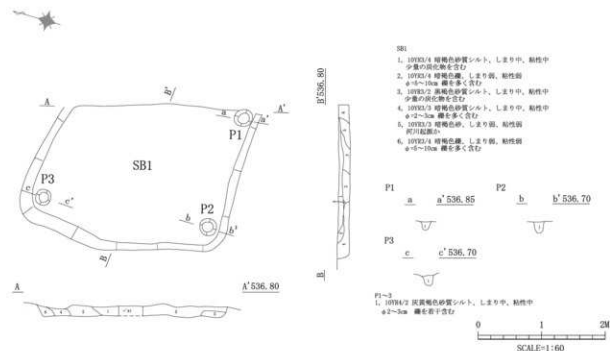
4 遺構

今回の調査で確認された遺構等には竪穴建物跡5棟、竪穴状遺構1基、溝跡1箇所、土坑・ピット・焼土・遺物包含層がある。また、遺構ではないが調査区内北側にはNW-SE方向の流路跡が確認され、径30cm程度の丸みをおびた礫が堆積していた。確認されたピットは他の集落遺跡と比較しても数が少なく、組み合わせて掘立柱建物跡となるようなものは確認されていない。焼土は、周辺に遺構の掘り込みがある可能性があるため周囲を丹念に検出したが、プラン等は確認されなかった。

竪穴建物跡

SB1 (第14図)

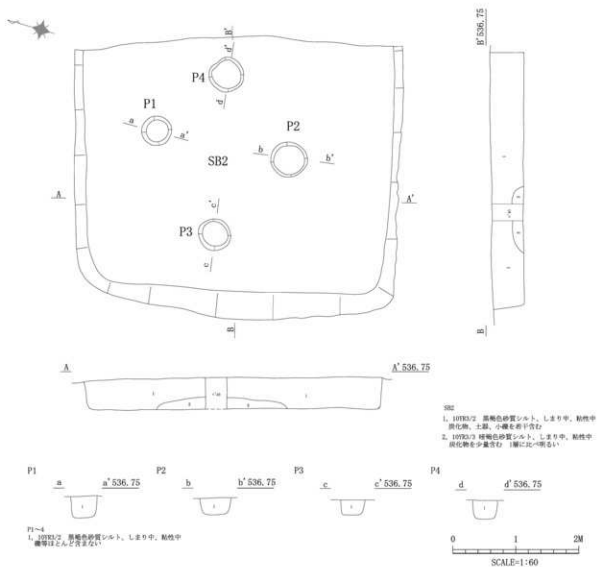
F3・G3グリッドに位置し、河川起源のやや緻密な礫混シルト層を掘り込んで構築されている。掘り込みは約20cmで、平面形は長軸3.1m×直行軸2.5m(残存)で方形を呈すると考えられ、調査区外東方に広がる。住居内床面には主柱穴と考えられるP1～P3のピットが検出された。壁は斜めに立ち上がり、埋土は6層を確認した。このうち埋土5・埋土6は河川作用による堆積の可能性がある砂礫層である。調査した範囲でカマドは確認していないが、東壁にカマドが構築されている可能性が考えられる。出土遺物は少量かつ破片のみで図示できるものはない。



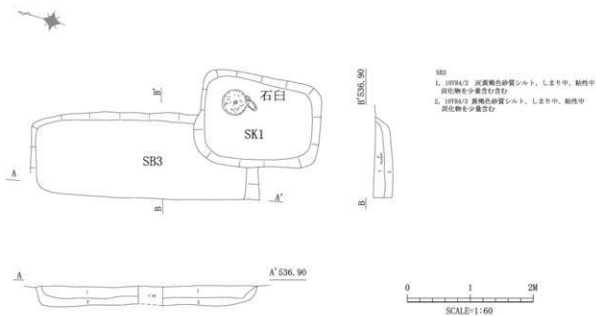
第14図 SB1 実測図

SB2 (第15図)

E3グリッドに位置する。比較的軟らかい砂質シルトを掘り込んで構築されており、確認された壁高は約50cmと深く、壁の立ち上がりは垂直に近い。平面形は長軸5.1m×直行軸4.45m(残存)で方形を呈すると考えられ、調査区外東側に広がる。埋土は2層を確認し、このうち主として埋土1に遺物や炭化物が包含されていた。調査範囲ではカマドを確認していないが、SB1と同様で東壁にカマドが構築されている可能性がある。床面からは柱穴と考えられるP1～P4のビットが確認された。



第15図 SB2実測図



第16図 SB3 実測図



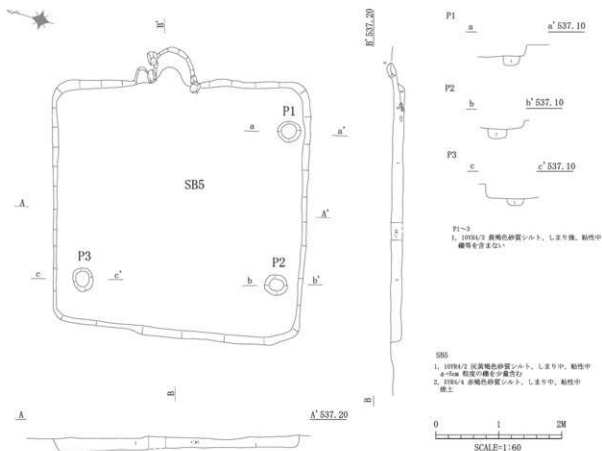
第17図 SB4 実測図

SB3 (第16図)

C1グリッドに位置する。比較的軟らかい砂質シルト層を掘り込んで構築されており、石臼が埋納されたSK1に切られる。壁高は約30cmで、壁は緩やかに立ち上がる。平面形は長軸3.6m×直行軸1.35m(残存)で方形を呈すると考えられ、調査区西側に広がる。埋土は2層を確認した。東壁中央付近から遺物がまとまった状態で遺物が出土している。カマド等は確認されていない。

SB4 (第17図)

C2グリッドに位置する。河川流路跡である比較的硬い砂礫層を掘り込んで構築しており、確認できた壁高は約15cmと浅く立ち上がりは緩やかである。住居内北西隅にはSK2が存在する。構築順序としてはSB4がSK2に先行する。平面形は主軸3.7m×直行軸3.7mの方形を呈し、東壁中央付近にカマドの痕跡と考えられる張り出しが観察できたが、構築材や焼土などは残存していなかった。床面にはP1～P3のピットが確認され、このうちP2からは小型黒色土器B(第23図3)が出土した。



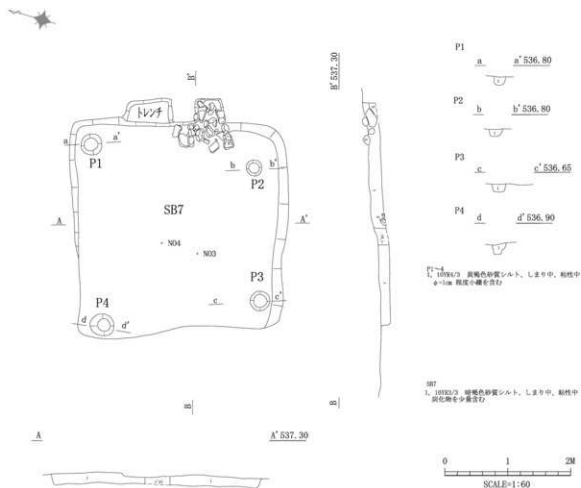
第18図 SB5 実測図

SB5 (第18図)

B1・B2グリッドに位置する。調査区内北側に位置し、河川流路跡およびSD1を切って構築されている。確認できた壁高は約20cmで、斜めに立ち上がる。平面形は主軸4.0m×直行軸4.05mのほぼ正方形を呈し、東壁中央にはカマドが構築されている。このカマドには構築材の礫片が若干残存しており、焚き口の部分には焼土が堆積している。床面にはP1～P3のピットが確認され、これらが主柱穴になると考えられる。

SB7 (第19図)

C2・D2グリッドに位置する。調査区中央東側に確認された緻密な遺物包含層中に検出された。壁高は約15cmを確認し、壁は垂直に近い立ち上がりを見せる。平面形は主軸3.25m×直行軸3.35mの方形を呈し、東壁のやや南よりにカマドが構築されている。カマド構築材と考えられる若干の石材が残存していたが、明瞭な焼土や炭化物塊は確認していない。床面には主柱穴と考えられるP1～P4のピットを検出した。

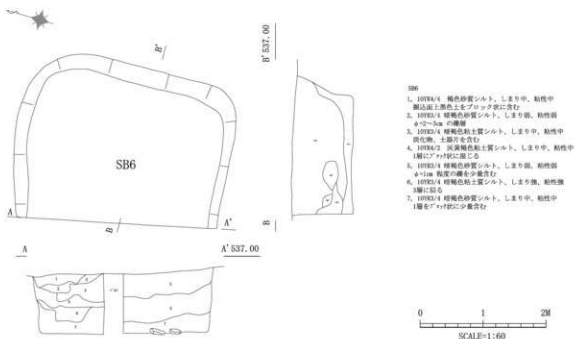


第19図 SB7実測図

竪穴状遺構・土坑・溝跡

SB 6 (第20図)

C1・C2・D1グリッドに位置する。この遺構は遺構検出当初は竪穴建物跡として精査を開始したが、遺構規模・床面の深さ・埋土の観察から竪穴状遺構と改めた。壁高は約100cmで壁は垂直に立ち上がる。平面形は長軸3.4m×直行軸2.5m(残存)で調査区外西側に延びる。埋土は竪穴建物跡に比べ複雑な堆積をしており、混入している遺物は磨耗の激しい土師器・須恵器の小破片のほか、永楽通宝があった。床面および遺構周辺の検出を試みたが柱穴は確認できていない。



第20図 SB 6 実測図

SK 1 (第21図)

C1グリッドに位置し、SB3を切る。長軸1.9m×短軸1.45mの長方形を呈し、壁高は約55cmで壁は斜めに立ち上がる。埋土はしまり・粘性ともにSB6によく似る。底面からは石臼と砥石が出土した。このうち石臼は下臼のみで、溝を彫った面が下になるように置かれていた。



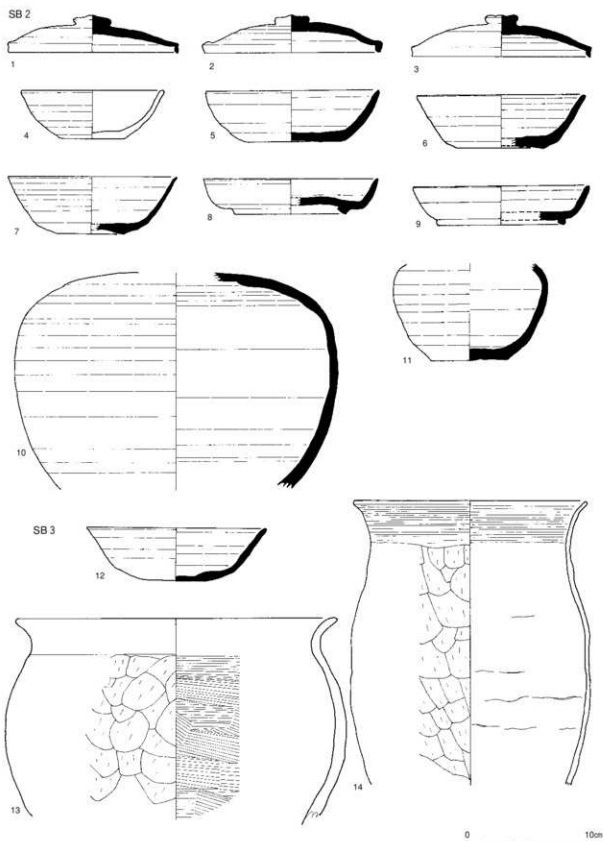
1. 1978a/3 黄褐色シルト質粘土、しまり強、粘性強部分、土器、灰化物を若干含む

SD 1

調査区内北側に位置し、SB5に切られている。遺物等は確認されていない。

第21図 SK 1 実測図

5 遺物



第22図 SB 2・SB 3 出土遺物実測図

SB2・SB3 (第22図)

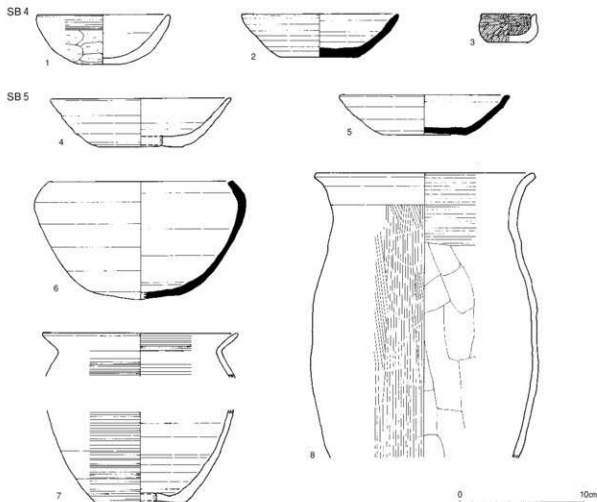
SB2出土土器のうち第22図2の杯蓋Bは天井部口縁近くに屈曲をもち、端部が「く」の字状に折れる。5～7の須恵器杯Aは底部切り離しが回転糸切りとなっている。8の須恵器杯Bは底部中央にくぼみを有し高台は内側に傾く。11の短頸壺は無台平底底部ヘラ切りとなっていた。これらは古代4～6期の特色と考えられる。

SB3出土土器のうち、12の須恵器杯Aは底部ヘラ切りである。14の土師器甕Aはやや下膨れの器形で、内面には粘土紐の積み上げ痕跡が見られた。これらは古代1～3期の特徴と考えられる。

SB4・SB5 (第23図)

SB4出土土器では、第23図1が非ロクロ系土師器杯Eで体部ヘラケズリの後に口縁部ヨコナデという古い様相を示すのに対し、2は底部回転ヘラ切りで器高の高い須恵器杯A、3は小型黒色土器Bで、2と3は後出と考えられる。なお3はSB4床面ビットから出土した。

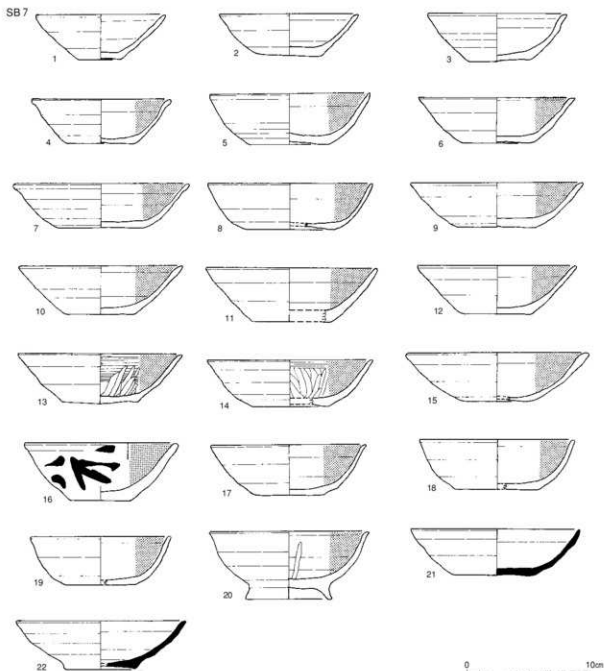
SB5出土土器は、第23図7の小型甕Dは口縁部の外反が強くカキメも丁寧である。8の甕Bは内面ナデであり、器形はやや下膨れで未だ定型化していない。これらは古代4～6期の特徴と考えられる。



第23図 SB4・SB5 出土遺物実測図

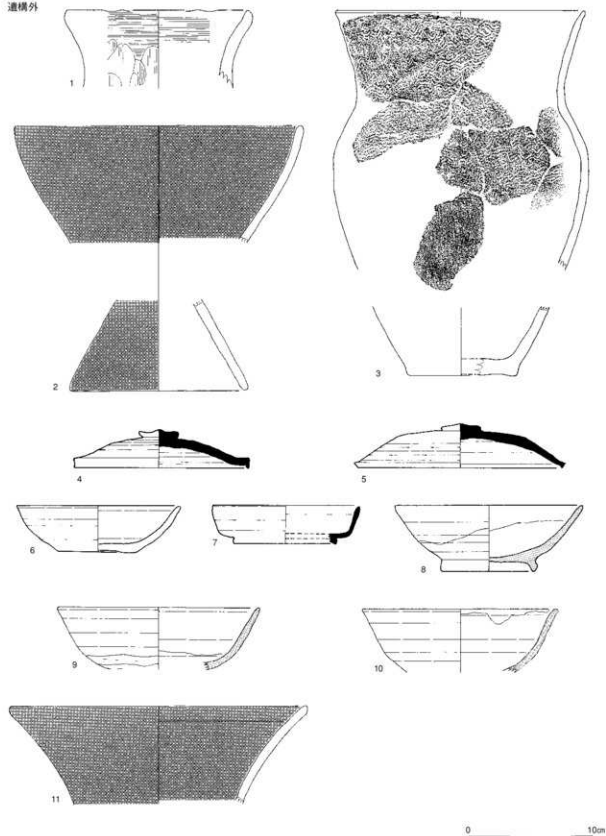
SB7 (第24図)

SB7出土土器は食器類の土師器環Aと黒色土器A環Aが大半を占め、図示できたものもこれらが主体である。黒色土器Aが食器の組み合わせの中で主体的になるのは古代7期以降と考えられるが、このうちロクロ調整の土師器環Aと共存するのは8期以降であり、この時期には須恵器環Aは姿を消すため、21・22の須恵器環Aを考慮に入れると本建物跡出土土器は古代7～8期の特徴を見せるといえる。また、16の土師器環Aには「八不」または「八万」の可能性がある墨書が確認できたが、やや不鮮明である。



第24図 SB7 出土遺物実測図

遺構外



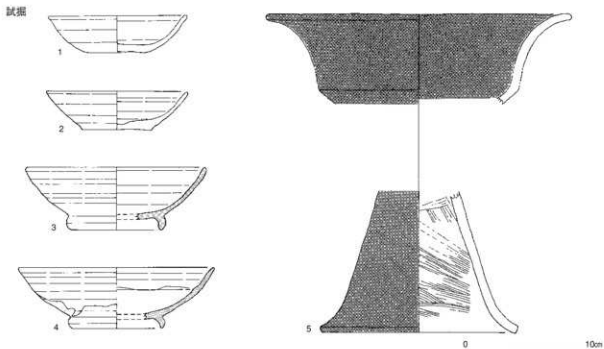
第25図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物 (第25図)

1～3、11は調査区東SB7付近に所在する遺物包含層から出土したものである。この層はしまりが強く緻密で周囲と比較して黒色である。2、11は赤彩が施されていた。これら弥生土器はいずれも器面が荒れている。また検出面から8～10の灰軸陶器が確認されており、本遺跡が古代7期以降も継続したことを示唆する。

試掘調査出土遺物 (第26図)

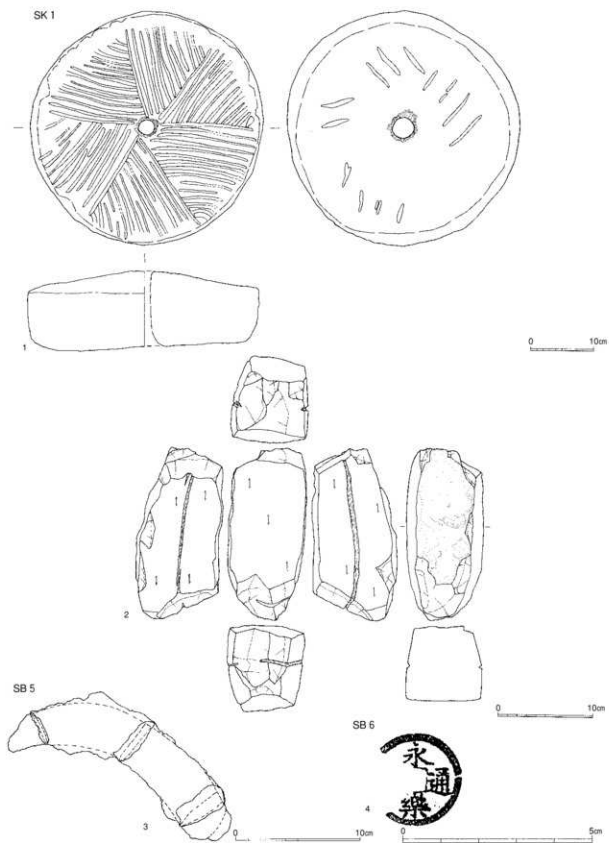
確認目的で実施した試掘調査で出土した遺物である。これら遺物の出土位置は発掘調査区の遺物包含層に近く、土層の特徴も類似しているため、同一包含層出土と考えられる。3～4の灰軸陶器は胎土が緻密で高台は外側に膨らみ断面が鋭い。5の高坏は大型で赤彩が施されている。本調査出土の弥生土器同様に器面が荒れており、破断面も磨耗していた。以上のように試掘については遺物の内容も、本調査の包含層および遺構外出土遺物に類似する。



第26図 試掘調査出土遺物実測図

石製品・金属製品 (第27図)

第27図1・2はSK1出土である。1の石臼は6区画の下臼で、中央の芯棒孔付近には敲打跡が観察される。裏面にも加工痕跡を確認できた。また、溝周りには光沢のある使用痕跡も確認される。2は観察内容から砥石として扱ったが、側面には幅約3mmの断面V字の溝を作り出しているため、用途は未だ定まらない。正面として扱った面は使用された痕跡が明瞭で、裏面は自然面を残す。3はSB5出土の鉄製鎌で、基部に着柄のための折り返しが確認できる。4は堅穴状遺構SB6から出土した永楽通宝である。



第27図 石製品・金属製品実測図



調査区全景（上が東）



調査前風景（北から）



調査区西壁



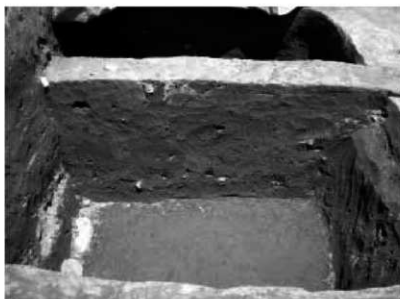
SK1 半割 (南から)



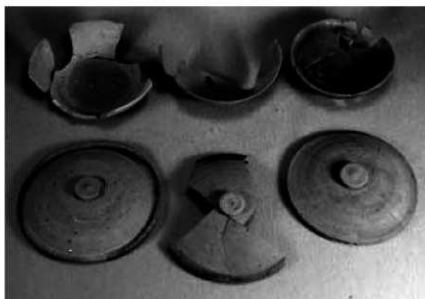
SK1 完掘 (南から)



SB3 遺物出土状況 (南から)



竪穴状遺構セクション（南から）



SB 2 出土遺物



SB 7 出土遺物



SB7 出土墨書土器



SB4 出土小型黒色土器 B



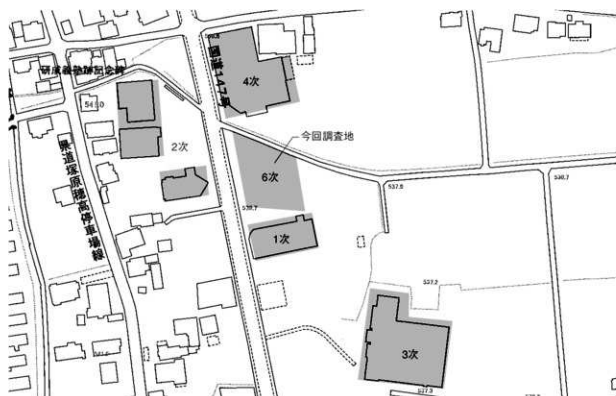
SK1 出土石臼

第3章 さんまいばし 三枚橋遺跡

1 調査の契機と経過

調査の契機と経過

この調査は店舗建設にかかる緊急発掘調査で、事業主体者は有限会社弥栄商会である。この店舗建設に関しては平成20年度に事業主体者から申し出があり、安曇野市教育委員会と事業主体者で埋蔵文化財保護協議を実施した。今回開発地の周囲は過去に発掘調査が行われ、弥生時代・平安時代を中心とした集落が確認されている場所である。このため今回開発地にも遺構等が良好に残存していることが予測され、また今回の開発において埋蔵文化財への影響が不可避であることが確認された。これを受けて記録保存のための緊急発掘調査を実施することで合意し、平成20年5月15日付け「土木工事のための埋蔵文化財発掘の届出」（文化財保護法第93条第1項）が事業主体者から提出され、5月23日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地に土木工事等について（通知）」が長野県教育委員会教育長からあった。この通知に前後して本書掲載のハツ口遺跡発掘調査が行われていたため、調査終了後の7月18日付けで安曇野市長を受託者、安曇野市教育委員会を調査担当者とする埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。発掘調査は7月22日から8月31日にかけて実施し、整理作業は現場調査終了時から平成21年3月31日まで断続的に行った。



第28図 発掘調査位置図（1/2,500）

調査体制

調査主体 安曇野市教育委員会

調査担当者 土屋 和章（文化財保護係）

作業参加者 青柳 久子、小穴 金三郎、小穴 兆司、勝野 辰雄、本田 富保、細尾 みよ子、
松田 洋輔

事務局 安曇野市教育委員会事務局 文化課

高原 正文（文化課長）、耶須野 雅好（文化財保護係長）、土屋 和章（文化財保護係）

調査日誌抄

平成20年

7月22日(火) 重機にてアスファルト除去開始。	8月11日(月)～12日(火) SB3～5精査。
7月23日(水)～28(月) 表土除去。	8月13日(水)～17日(日) 盆休み。
7月29日(火) 表土除去、作業員による遺構検出開始。	8月18日(月) SB4、ビット精査。
7月30日(水) 表土除去終了、SB1～3精査。	8月19日(火) 雨天のため9時30分中止。
7月31日(木) SB1～4精査。	8月20日(水) SB写真撮影、ビット精査。
8月1日(金) SB3～4精査。	8月21日(木) ビット精査。
8月4日(月) 雨天中止。	8月22日(金) 写真撮影、測量。
8月5日(火) SB1・2・4・5精査、夕方雷雨。	8月25日(月) 作業なし。
8月6日(水) 昨日雷雨の現場復旧。	8月26日(火)～27日(水) 現場撤収。
8月7日(木)～8月(金) SB2～5精査。	8月28日(木) 測量現場確認。
	8月29日(金)～31日(日) 現場撤収。

2 遺跡の位置と環境

地理的環境

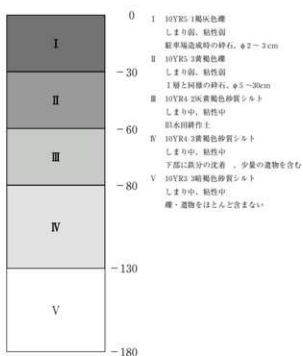
三枚橋遺跡の所在する安曇野市穂高^{やばら}・白^{しろかね}地籍は松本盆地の中ほどに位置し、西は飛騨山地、東は筑摩山地と接する。本遺跡付近は梓川（犀川）水系の堆積物の上に西の飛騨山地から東流する烏川によって形成された扇状地の扇端付近に位置し、標高は539m前後である。現在の扇状地は須砂渡付近を扇頂として穂高市街地方面へ広がっており、完新世（沖積世）のものである。

現扇状地面上を流れる河川は歴史的に流路が一定しておらず、今回の発掘調査面は過去の豪雨時などに洗い出された細粒のシルト質などの堆積物が凹地をレンズ上に埋めて形成されている。調査地点からは顕著な河川流路跡などはなく、厚いシルトの堆積が確認され検出された遺構はこの層を掘り込んで構築されている。調査区北壁の土層概念図は第29図のとおりである。

歴史的環境

三枚橋遺跡の所在する安曇野市穂高矢原・白金地籍は矢原遺跡群として「倭名類聚抄」にある安曇郡矢原郷、平安時代後期の矢原御厨に比定されている地域である。この地域では過去の発掘調査により縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が確認されている。近年では平成19年に実施した、三枚橋・藤塚遺跡発掘調査で古代の竪穴建物跡が25棟（安曇野市教育委員会2009）、平成20年に実施した八ツ口遺跡発掘調査でやはり古代の竪穴建物跡が6棟確認された。

今回の調査は三枚橋遺跡第6次発掘調査にあたり、調査地点は安曇野市穂高1766番地1外に所在する。この地は、過去に水田として使用されており、隣地に店舗が建設されてからはその駐車場であったため遺構等の残存状況は良好であった。隣地の店舗建設に伴う発掘調査では、古代および弥生時代の集落跡が確認されており、今回の調査でもこの集落の一部が確認された。

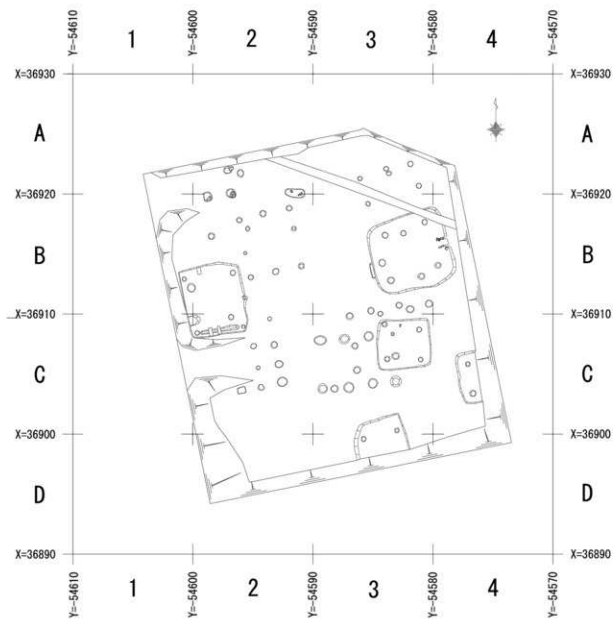


第29図 三枚橋遺跡北壁土層

3 調査の方法

発掘調査

過去の発掘調査の所見から今回開発地に埋蔵文化財が良好に残存していることおよび遺構深度が明らかであったことに加え、保護協議中は駐車場として使用しておりアスファルトの除去ができなかったため本件では試掘調査を実施しなかった。本調査では店舗建設に影響をうける範囲全体を調査区として設定し表土除去を行った。調査面積は約700㎡である。発掘調査に際しては調査区全体に10mグリッドを設定し、表土除去については遺構検出面まで重機を使用した。遺構精査は、竪穴建物跡に関して基本的に4分割、その他の遺構については2分割して掘り下げを実施した。遺構測量については、基本的に業者委託としたが必要に応じて20分の1、10分の1の縮尺で実測図を作成をした。記録写真としては主として35mmフィルムカメラを使用し、補助的にデジタルカメラを併用した。



第30図 調査区全体図 (1/300)

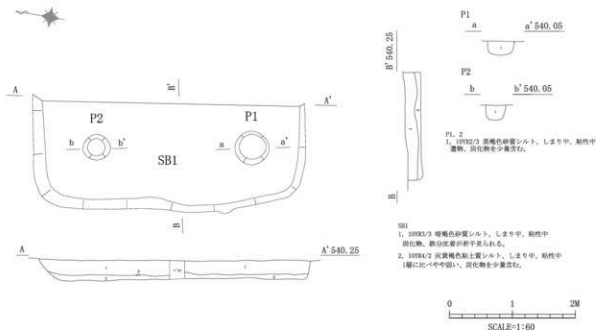
4 遺構

今回の調査で確認された遺構は竪穴建物跡5棟、掘立柱建物跡4棟、その他に土坑1基、ピット等である。遺構確認面は、矢原遺跡群における過去の調査例にならって基本土層のV層上面とした。調査区全体図は第30図に示す。竪穴建物跡は調査区東側に4棟、西壁付近に1棟の分布を示す。ピット等も基本的にこの配置に倣っているようで、調査区中央付近では遺構密度が疎である。また、調査区内北東のA3・A4・B3・B4グリッド付近からは弥生土器が出土した。過去の試掘・発掘調査でも弥生土器が出土しており、この付近に弥生時代の遺構があると想定して精査したが今回の調査では確認できなかった。

竪穴建物跡

SB1 (第31図)

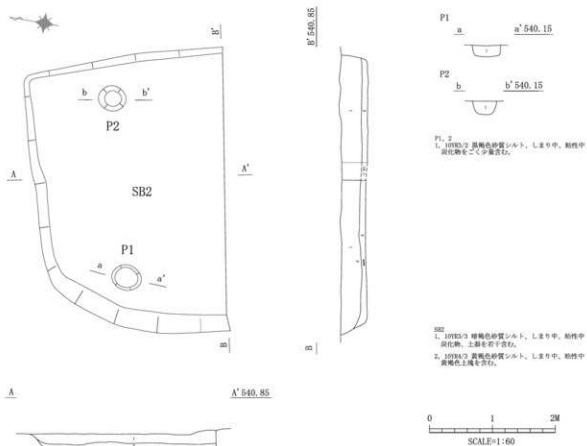
C4グリッドに位置する。比較的軟らかいシルト層を掘り込んで構築されており壁高は約25cmで壁は斜めに立ち上がる。平面形は長軸4.3m×直行軸1.75m(残存)で方形を呈すると考えられ、調査区東壁にかかる。埋土は2層を観察した。埋土1は鉄分の沈着がみられ、この下に薄く埋土2が堆積する。遺物は埋土2上面から床面にかけて確認された。また、埋土2は炭化物を少量含む。床面からは支柱穴と考えられるピット2基を検出したため、これらを精査した。なお、カマド等の火処は今回の調査では確認されていない。



第31図 SB1実測図

SB2 (第32図)

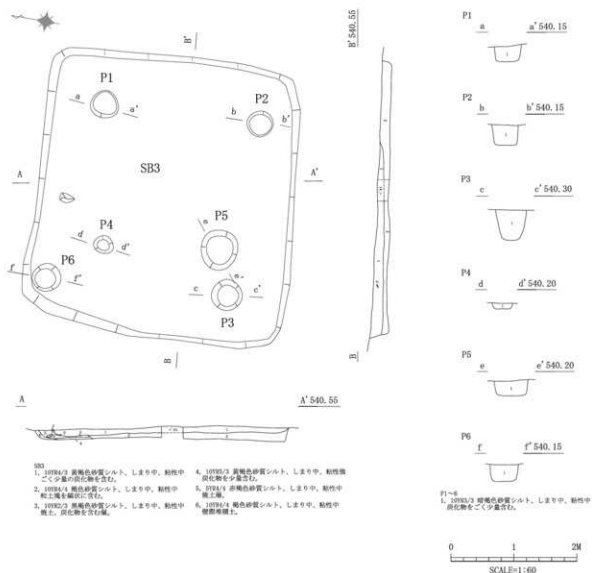
C3・D3グリッドに位置する。他の遺構と同様に比較的軟らかい砂質シルトを掘り込んで構築されており、確認された壁高は約40cmで壁は垂直に近い立ち上がりを見せる。平面形は長軸4.5m×直行軸3.0m(残存)のやや歪んだ方形を呈すると考えられ、調査区南壁にかかる。埋土は2層を確認し、埋土1は少量の炭化物を含んでいた。遺物は埋土2上面から床面にかけて出土している。床面からは支柱穴と考えられるピットを2基検出したため、これらを精査した。カマド等は確認されていないが、今回調査範囲外に存在する可能性がある。



第32図 SB2 実測図

SB3 (第33図)

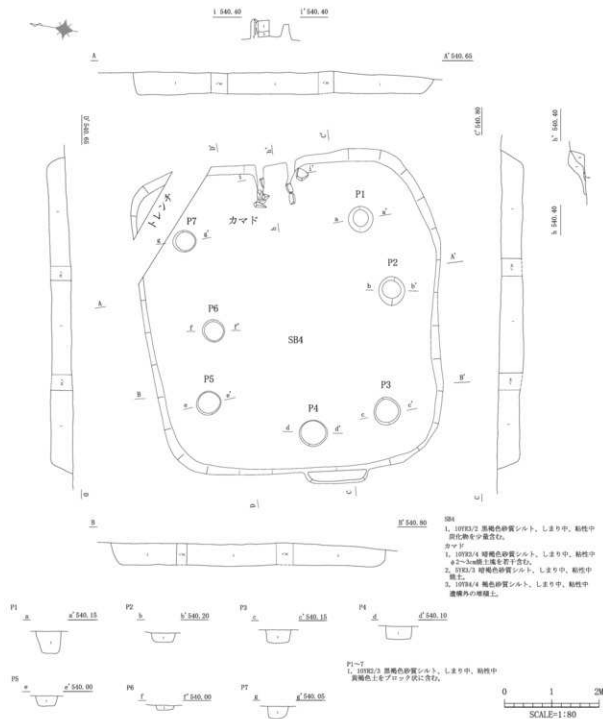
C3グリッドに位置する。確認された壁高は最も深い部分でも約30cmと他の堅穴建物跡に比べ浅く、壁は斜めに立ち上がる。平面形は主軸4.0m×直行軸4.5mの方形を呈する。埋土は6層確認された。北壁付近で炭化物を含む埋土および焼土が確認され、またこの付近で20~30cm程度の隙が複数確認された。これらから、北壁中央付近にカマドが存在し、この建物跡は住居として使用された後、廃絶時にカマドを取り壊したと考えられる。ただし、P1付近およびP4付近の床面から少し浮いた位置でそれぞれ正位の土師器甕が1個体ずつ出土しており、これがSB3使用時に伴うものか廃絶直後に帰属するものかは確認できていない。床面の遺構としては主柱穴と考えられるピットを含め、6基のピットが確認された。



第33図 SB3実測図

SB4 (第34図)

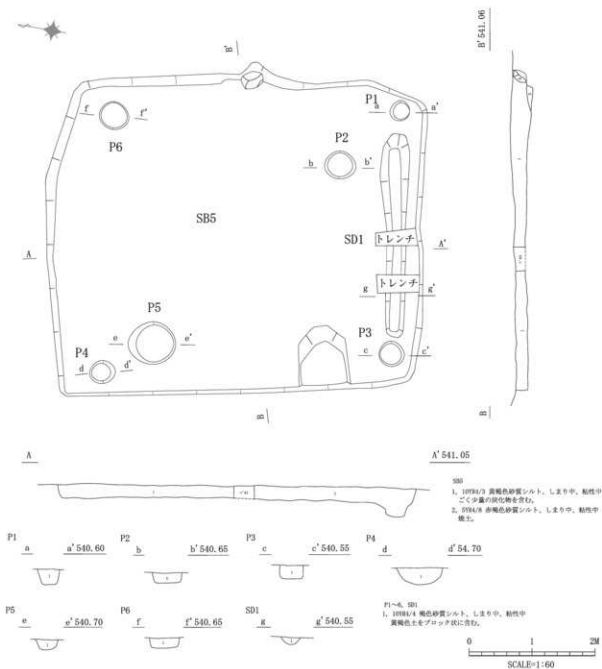
B3・B4グリッドに位置する。壁高は約40cmで、壁は垂直に近い立ち上がりみせる。平面形は主軸6.5m×直行軸6.2mの方形を呈し、東壁中央にカマドが構築されていた。カマド付近には後世の攪乱が若干確認されたが、構築材は原位置を保っていた。カマドに正対する西壁中央には幅約100cm、踏み面約20cm、蹴上約20cmの階段状施設が確認され、これが本建物跡の入り口にかかわる施設と考えられる。床面からは支柱穴と考えられるものを含み、7基のピットが確認された。



第34図 SB4 実測図

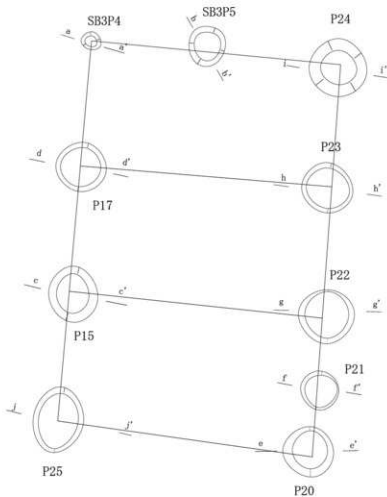
SB5 (第35図)

B1・B2・C1・C2グリッドに位置する。壁高は約20cmを確認し、壁は垂直に近く立ち上がる。平面形は主軸5.0m(残存)×直行軸5.95mの方形を呈すると考えられ、調査区西壁にかかる。東壁中央にはカマドの痕跡と考えられる張り出しと構築材の残存と考えられる礎が確認された。埋土は2層を確認し、東壁付近に位置する埋土2は焼土である。床面からは主柱穴と考えられるピットのほかに南壁付近に溝跡を検出したが、周溝となるかは不明である。



第35図 SB5 実測図

掘立柱建物跡



SB3P4

a a' 540.75



P4
1. 10182/3 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
φ=5mm程度の小礫を少量含む。

P17

d d' 540.90



P17
1. 10184/4 褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒、小礫を含む。

P22

g g' 54.55



P22
1. 10183/4 緑褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
灰化層、黄褐色土粒を少量含む。

P25

j j' 540.70



P25
1. 10183/4 緑褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
灰化層、黄褐色土粒を少量含む。

SB3P5

b b' 540.65



P5
1. 10182/3 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
φ=5mm程度の小礫を少量含む。

P20

e e' 540.60



P20
1. 10185/4 緑褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
灰化層を少量含む。

P23

h h' 540.45



P23
1. 10183/4 緑褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
灰化層、黄褐色土粒を若干含む。

P15

c c' 540.60



P15
1. 10184/4 褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒を初めに含む。

P21

f f' 540.55



P21
1. 10183/2 黒褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
黄褐色土粒をごく少量含む。

P24

i i' 540.40



P24
1. 10183/4 緑褐色砂質シルト、しまり中、粘性中
灰化層、黄褐色土粒を少量含む。

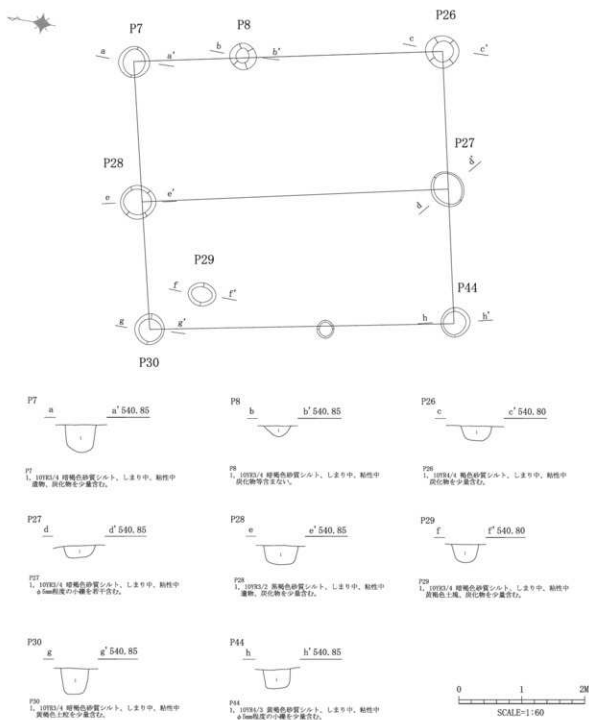


SCALE=1:60

第36図 ST 1 実測図

ST1 (第36図)

C3グリッドに位置し、SB3に切られる。P15～P25で構成される1間×3間の掘立柱建物跡で、長軸方向がN83°Eを指す。柱間は梁間約400cm、桁行約205cmを測り、確認される建物跡の規模としては4.0m×6.1mとなる。柱穴は径約70cmの円形プランで掘り込みが約30～50cmのものが多い。SB3と重複関係にあるが前後関係は不明確である。この建物跡から時期比定につながる遺物は確認されていない。



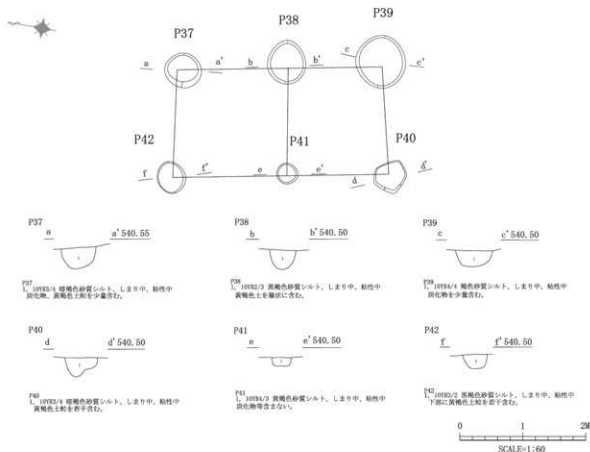
第37図 ST 2 実測図

ST 2 (第37図)

B2グリッドに位置する。P7～P44で構成される1間×2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN78°Eを指す。柱間は梁間約485cm、桁行約200cmを測り、確認される建物跡の規模としては4.85m×4.25mとなる。柱穴は径約50cmの円形プランで掘り込みが30cm程度のものが多い。この建物跡から時期比定につながる遺物は確認されていない。

ST 3 (第38図)

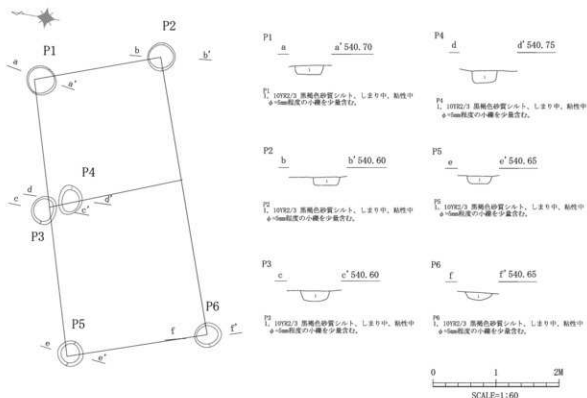
C2グリッドに位置する。P37～P42で構成される1間×2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN10°Wを指す。柱間は梁間約170cm、桁行約150cmを測り、確認される建物跡の規模としては1.7m×3.35mとなる。柱穴は径約50cmの円形プランで掘り込みが30cm程度のものが多い。この建物跡から時期比定につながる遺物は確認されていない。



第38図 ST 3 実測図

ST 4 (第39図)

A3・B3グリッドに位置する。P1～P6で構成される1間×2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN74°Eを指す。柱間は梁間約210cm、桁行約240cmを測り、確認される建物跡の規模としては2.1m×4.45mとなる。柱穴は径約40cmの円形プランで掘り込みが20cm程度のものが多い。この建物跡から時期比定につながる遺物は確認されていない。



第39図 ST 4 実測図

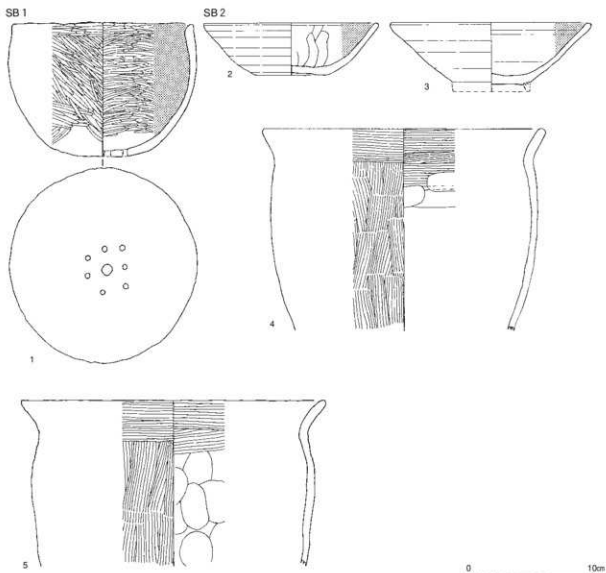
5 遺物

SB1・SB2 (第40図)

SB1出土土器である第40図1は、内面黒色の甎であり底部には8箇所の穿孔がある。内外面ともに丁寧なミガキ調整が施されている。SB1からはこの他に形状がわかる出土土器はなかった。

SB2出土土器では2が内面にミガキ調整を施す黒色土器の坏Aで底部は糸切りである。3も内面黒色処理が施され、高台を有すると考えられる部分が欠損している。底部切り離しはヘラ切りであった。

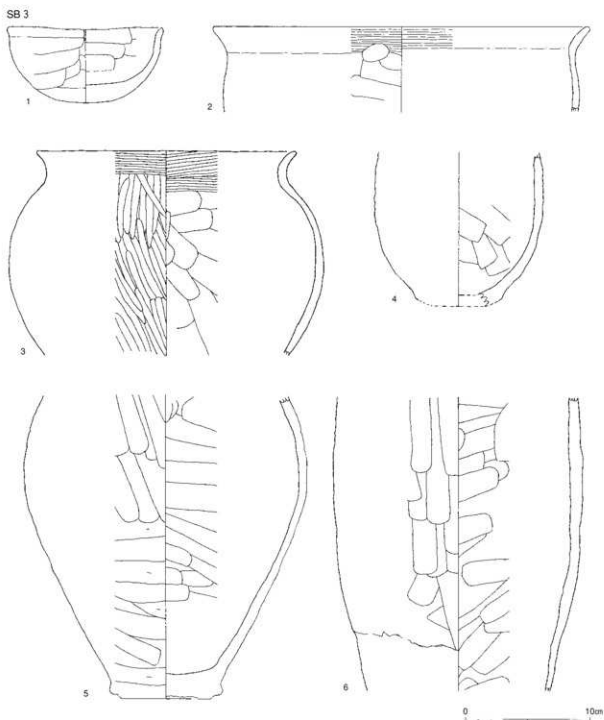
4・5はハケメ調整の甎Bで内外面ともに丁寧な調整が施される。この他、須恵器が見られないなどの特徴から本建物跡出土土器は古代7期以降の様相を示すと考えられる。



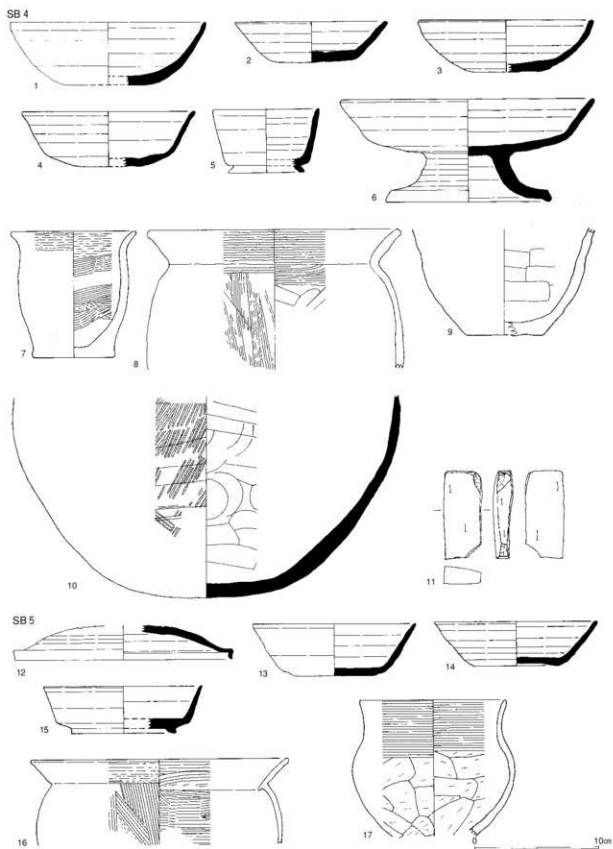
第40図 SB1・SB2出土遺物実測図

SB 3 (第41図)

SB 3 建物跡出土遺物は、非ロクロ成形の土師器が主体を占める点が特徴である。6に見られるような長胴甕が確認され、また住居内北壁にはカマドと考えられる痕跡を残すことからこの遺構の年代を古墳時代後期から奈良時代初頭にかけてと考えたい。6の長胴甕と3のような球胴甕との共伴は、昭和59年(1984)に発掘された馬場街道遺跡6号住居址にも見られる(穂高町教育委員会1987)。



第41図 SB 3 出土遺物実測図



第42図 SB 4・SB 5 出土遺物実測図

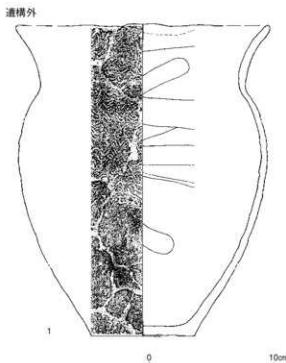
SB4・SB5 (第42図)

SB4では、図示した1~4に見られるように須恵器環Aが食器の主体を占めている。底部切り離しは1~4までいずれもヘラ切りあるいは回転ヘラ切りで、回転糸切りは見られない。5の須恵器環Bの器形は下神遺跡SB126から確認されているものと同様と考えられる。6の高盤は東壁のカマド付近からはほぼ完形で出土した。煮沸具としては土師器甕があり、8は甕Bのうちでも定量化が進み比較的丁寧なハケメ調整が施されているものである。須恵器環Aの底部切離しに回転糸切りが出現するのは古代3期以降、半数以上の高い割合を示すのが古代4期以降である傾向からこの建物跡は古代3~4期と考えられる。この他、貯蔵具としての10の須恵器甕や11の仕上げ砥と考えられるきめの緻密な砥石などが出土している様相は、今回発掘した他の建物跡とは異なる特色であり、この建物跡が他の遺構に比較して大型であることを加えてこの遺跡としての特徴といえる。

SB5も、SB4と同様に食器の主体が定型化した須恵器環Aと考えられる。ここでは環Bと坏蓋も出土しており、特に12の坏蓋は口径が17.2cmと大型である。坏蓋Bの口径が13.5cm、15cm、17cm前後に分布の中心を持つようになるのは古代4・5期であり、坏Aの存続をほぼ古代7期までと考えると本建物跡の年代は幅をもたせて古代4~6期と考えられる。なお、16の土師器甕Bは口頸部と体部の境界内面に粘土のはみ出しが観察でき、このことから成形時に体部と口頸部をつくり分けて後に接合したことがわかる。また、17の小型甕は体部をヘラ状工具の粗い調整で仕上げ、やや長めの口頸部はヨコナデで調整している。

遺構外出土遺物 (第43図)

今回の調査では弥生時代に比定される遺構は確認していないが、遺構外からは第43図にある遺物が出土した。出土位置はA3・B3グリッド付近で、SB4建物跡の北側周辺である。口縁部から体部上半にかけて櫛描の波状文を施し、内面は基本的に横方向のナデ調整を施す甕形土器で、弥生時代後期と考える。今回調査区に隣接する過去の調査区からも弥生時代の土器や遺構が確認されており、本遺跡が弥生時代までさかのぼる確証となっている。



第43図 遺構外出土遺物実測図



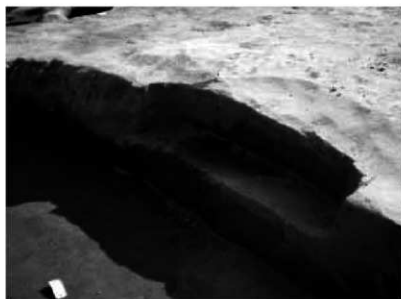
調査前風景（南西から）



SB4 完掘（西から）



SB4 カマド完掘（西から）



SB4 階段状施設（北東から）



ST1 完掘（南から）



SB1 甕出土状況（南東から）



SB 1 出土甌



SB 4 出土高盤



遺構外出土弥生土器

第4章 平成20年度発掘調査の総括

平成20年度に実施した埋蔵文化財保護措置の詳細は各章記載のとおりであり、このうち2件の発掘調査によって得られた成果は大きい。以下、まず平成20年度実施の2件の発掘調査で掘り所とした時期設定の区分について、中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見と安曇野市内での調査事例を参考に第2表に示す（安曇野市教育委員会2009、小平1990）。

第2表 時期設定

暦年代	時期	段階	特 徴
7世紀後半 ↓ 8世紀中葉	1期	第1段階	●食器で非ロクロ調整の土師器杯や高杯、須恵器杯D、貯蔵具もフラスコ形瓶など古墳時代的な様相 ●須恵器杯Aや杯Bが浸透 ●須恵器杯Aの底部切離しに回転糸切りが出現
	2期		
	3期		
8世紀後葉 ↓ 9世紀前半	4期	第2段階	●須恵器杯Aの底部切離して回転糸切りが高い割合を示す ●在地産の須恵器を軸に食器が構成され、定形的な器形と厳しい法量分化の規制 ●土師器甕B・小型甕Dへの定形・規格化
	5期		
	6期		
9世紀後半	7期	第3段階	●椀・皿の登場 ●黒色土器Aが食器の主体 ●貯蔵具に灰軸陶器の壺・瓶類が加わる
	8期		
10世紀	9期	第4段階	●食器から須恵器が衰退し、在地の土師器と黒色土器A、灰軸陶器などで構成 ●煮炊具は10期で長胴甕と小型甕の組合せから羽釜と小型甕の組合せへと変化 ●10期以降貯蔵具は灰軸陶器の広口瓶と短頸壺が主体
	10期		
	11期		
11世紀前半 ↓ 12世紀前半	12期	第5段階	●食器の構成は前段階と変わらないが、杯・椀・皿などに大小の法量分化 ●竪穴建物跡からの煮炊具の減少
	13期		
14期			
15期			

次に、平成20年度の発掘調査によって明らかになった点と今後の課題を記して総括としたい。

今回の調査で明らかになった点は以下のとおりである。

- ①ハツ口遺跡の北端と考えられる流路跡が確認された。これは柏原沢の末流と推察される。
- ②ハツ口遺跡は尾根状に西から張り出した微高地に展開し、今回の発掘調査では弥生時代後半期から中世にまで及ぶ土地利用が確認された。
- ③三枚橋遺跡では竪穴建物跡の入り口と考えられる階段状施設が確認された。これは、カマドに対面

する壁面中央に設置されていた。

今後の課題とされる点は以下のとおりである。

- ①ハツ口遺跡調査区中央東壁付近では、非常に緻密で堅い土層の上面から弥生土器が張り付いたように出土している。周囲よりも標高が高かつ層中には遺物等を含まない点から、掘り込みを持つ遺構や厚みのある遺物包含層ではないと考えられる。
- ②ハツ口遺跡調査区西壁では中世の竪穴状遺構を確認した。この時代の遺構は調査区外西側へどのように展開するか。
- ③ハツ口遺跡調査区西壁付近で確認した石臼と砥石を埋納する遺構の性格はどのようなものだったか。
- ④三枚橋遺跡の調査区中央には遺構等の密度が疎な空間が存在する。空間利用の観点からこの場所がどのように利用されたのか、または利用されなかったのか。
- ⑤三枚橋遺跡 SB 4 は、他の遺構に比べ平面形が大きくまた確認された掘り込みも深いものであった。加えてこの遺構からは入り口施設と考えられる階段状の段も確認されている。出土遺物の面からも、他の建物跡では確認されていない高盤、須恵器甕 A、砥石（仕上げ砥か？）が出土している。これらから SB 4 の集落内での役割を考察できるか。

引用・参考文献（五十音順）

- 安曇野市教育委員会 2009 「三枚橋・藤塚遺跡—安曇野市穂高交流学習センター建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」安曇野市の埋蔵文化財第2集 安曇野市教育委員会
- 桐原 健 1993 「中世末における石臼の所有者」『信濃』45-4 信濃史学会 pp.27-37
- 小平和夫 1990 「第5節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 長野県教育委員会 pp.97-158
- 長野県埋蔵文化財センター 1987 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1 岡谷市内」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書1 長野県教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 1990 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 長野県教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 2005 「安曇野農業水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書—三郷村内—三角原遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76 農林水産省関東農政局安曇野農業水利事務所、(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
- 穂高町教育委員会 1987 「矢原遺跡群（馬場街道遺跡）—県道柏矢町～田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書—」穂高町教育委員会
- 穂高町教育委員会 2001 「穂高町 一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡 穂高沢水系による開発沢、上原古墳」穂高町教育委員会
- 三輪茂雄 1975 「石臼の謎—産業考古学への道—」産業技術センター

付表1 ハツ口遺跡建物跡観察表

名称	位置 (グリッド)	規模 (m)			平面形	主軸方向 (長軸方向)	か・カマド	備考
		主軸 (長軸)	直行軸 (短軸)	壁高				
SB1	F3・G3	(3.1)	(2.5)	0.2	方形	(N81°W)	未確認	
SB2	E3	(5.1)	(4.45)	0.5	方形	(N74°E)	未確認	
SB3	C1	(3.6)	(1.35)	0.3	方形	(N16°W)	未確認	SK1に切られる
SB4	C2	3.7	3.7	0.15	方形	N78°E	未確認	東壁にカマドか
SB5	B1・B2	4.0	4.05	0.2	方形	N74°E	東壁中央にカマド	
SB6	C1・C2・D1	(3.4)	(2.5)	1.0	長方形	(N1°W)	未確認	壁状遺構
SB7	C2・D2	3.25	3.35	0.15	方形	N74°E	東壁南寄にカマド	
SK1	C1	1.9	1.45	0.55	長方形	N8°W	なし	石臼、砥石を埋納

付表2 ハツ口遺跡出土土器観察表

図版 NO	遺物 NO	遺構名	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部位
								外面調整	内面調整	底部	
22	1	SB2	須恵器	坏蓋	13.3	—	2.9	ロクロナデ+ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	—	体部
22	2	SB2	須恵器	坏蓋	13.8	—	3.0	ロクロナデ+ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	—	体部
22	3	SB2	須恵器	坏蓋	14.1	—	3.3	ロクロナデ+ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	—	体部
22	4	SB2	土師器	坏A	11.4	5.2	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
22	5	SB2	須恵器	坏A	13.5	7.4	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
22	6	SB2	須恵器	坏A	13.4	7.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
22	7	SB2	須恵器	坏A	13.4	5.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
22	8	SB2	須恵器	坏B	13.8	8.8	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
22	9	SB2	須恵器	坏B	14.0	10.0	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	IND	口縁部~底部
22	10	SB2	須恵器	長頸壺A	IND	IND	IND	ロクロナデ	ロクロナデ	IND	体部上半~体部下半
22	11	SB2	須恵器	短頸壺C	IND	6.0	IND	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	体部下半~底部
22	12	SB3	須恵器	坏A	14.2	6.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	口縁部~底部
22	13	SB3	土師器	斐F	24.8	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部~体部下半
22	14	SB3	土師器	斐A	18.0	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部~体部下半
23	1	SB4	土師器	坏E	10.6	4.0	3.9	ケズリ+ナデ	ナデ	ヘラ切り	口縁部~底部
23	2	SB4	須恵器	坏A	12.3	6.0	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁部~底部
23	3	SB4	黒色土器B	小型土器	4.2	3.2	2.2	ミガキ	ミガキ	ミガキ	口縁部~底部
23	4	SB5	土師器	坏A	14.2	6.4	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
23	5	SB5	軟質須恵器	坏A	13.4	6.6	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部~底部
23	6	SB5	須恵器	鉢B	14.4	5.4	9.2	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	口縁部~底部
23	7	SB5	土師器	小型斐D	15.0	7.0	IND	ロクロナデ	ロクロナデ	IND	口縁部~頸部、 体部下半~底部

図版 NO	遺物 NO	遺構名	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部位
								外面調整	内面調整	底部	
23	8	SB 5	土師器	甕B	17.0	IND	IND	ハケメ調整	ナデ	IND	口縁部～体部下平
24	1	SB 7	土師器	坏A	10.2	3.2	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	2	SB 7	土師器	坏A	10.9	4.8	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	3	SB 7	土師器	坏A	10.9	4.9	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	4	SB 7	黒色土器A	坏A	11.0	5.4	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	5	SB 7	黒色土器A	坏A	12.6	6.4	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	口縁部～底部
24	6	SB 7	黒色土器A	坏A	12.4	5.4	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	口縁部～底部
24	7	SB 7	黒色土器A	坏A	14.0	6.4	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	口縁部～底部
24	8	SB 7	黒色土器A	坏A	13.0	6.8	3.6	ロクロナデ	ナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	9	SB 7	黒色土器A	坏A	13.6	6.4	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	10	SB 7	黒色土器A	坏A	12.8	5.5	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	11	SB 7	黒色土器A	坏A	13.4	6.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	IND	口縁部～底部
24	12	SB 7	黒色土器A	坏A	12.6	5.2	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	13	SB 7	黒色土器A	坏A	13.0	6.0	3.9	ロクロナデ	ナデ、ミガキ	回転糸切り	口縁部～底部
24	14	SB 7	黒色土器A	坏A	13.0	6.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	15	SB 7	黒色土器A	坏A	14.5	5.2	3.9	ロクロナデ	ナデ	ヘラ切り	口縁部～底部
24	16	SB 7	黒色土器A	坏A	12.2	5.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	口縁部～底部
24	17	SB 7	黒色土器A	坏A	12.2	5.8	4.0	ロクロナデ	ナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	18	SB 7	黒色土器A	坏A	12.2	6.6	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	19	SB 7	黒色土器A	坏A	11.0	5.2	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	口縁部～底部
24	20	SB 7	黒色土器A	輪	12.4	6.8	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	IND	口縁部～底部
24	21	SB 7	軟質須恵器	坏A	13.3	6.4	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
24	22	SB 7	軟質須恵器	坏A	13.4	5.6	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
25	1	SX 1	弥生土器	甕	14.4	IND	IND	ナデ+ハケメ	ナデ	IND	口縁部～頸部
25	2	SX 1	弥生土器	高坏	22.6	IND	14.0	ミガキ	ミガキ	IND	口縁部、台部
25	3	SB 7	弥生土器	甕	19.4	8.5	IND	ナデ+櫛目文	ナデ	ミガキ	口縁部～体部上平、 底部
25	4	検出面	須恵器	坏蓋	13.8	—	3.0	ロクロナデ+ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	—	体部
25	5	検出面	須恵器	坏蓋	16.2	—	3.5	ロクロナデ+ 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	—	体部
25	6	検出面	土師器	坏A	12.8	6.4	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	IND	口縁部～底部
25	7	検出面	須恵器	坏B	11.6	8.0	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	IND	口縁部～底部
25	8	検出面	灰輪陶器	輪A	14.8	7.2	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
25	9	検出面	灰輪陶器	輪A	15.8	IND	IND	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラケズリ	口縁部～体部下平

図版 NO	遺物 NO	遺構名	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部位
								外面調整	内面調整	底部	
25	10	検出面	灰輪陶器	椀A	15.3	IND	IND	ロクロナデ	ロクロナデ	IND	口縁部～体部下半
25	11	SX2	弥生土器	壺	23.2	IND	IND	IND	IND	IND	口縁部
26	1	試掘	土師器	坏A	10.8	4.6	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
26	2	試掘	土師器	坏A	10.8	5.4	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
26	3	試掘	灰輪陶器	椀A	14.2	6.9	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	口縁部～底部
26	4	試掘	灰輪陶器	椀A	15.4	6.9	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	口縁部～底部
26	5	試掘	弥生土器	高坏	23.3	14.9	IND	ナデ	ヘラナデ	IND	口縁部～体部下半、 台部

付表3 ハツ口遺跡出土石製品観察表

図版 NO	遺物 NO	遺構名	種別	石材	最大径 (cm)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (kg)
27	1	SK1	石臼	安山岩	37.1	—	—	12.7	23.2
27	2	SK1	砥石	泥質凝灰岩	—	18.05	7.93	10.3	1.91

付表4 ハツ口遺跡出土金属製品観察表

図版 NO	遺物 NO	遺構名	種別	石材	最大径 (cm)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)
27	3	SB5	鎌	鉄	—	18.3	4.78	3.01	202.6
27	4	SB6	水薬通宝	青銅	2.45	—	—	0.14	1.7

付表5 三枚橋遺跡建物跡観察表

名称	位置 (グリッド)	規模 (m)			平面形	主軸方向 (長軸方向)	炉・カマド	備考
		主軸 (長軸)	直行軸 (短軸)	壁高				
SB1	C4	(4.3)	(1.75)	0.25	方形	(N10°W)	未確認	
SB2	C3・D3	(4.5)	(3.0)	0.4	方形	(N17°W)	未確認	
SB3	C3	4.0	4.5	0.3	方形	N5°W	未確認	北壁付近で土器出土
SB4	B3・B4	6.5	6.2	0.4	方形	N75°E	東壁中央にカマド	階段状遺構
SB5	B1・B2・C1・C2	5.0	5.95	0.2	方形	N80°E	東壁中央にカマドか	
ST1	C3	6.1	4.0	—	1間×3間	N83°E	確認されず	
ST2	B2	4.85	4.25	—	1間×2間	N78°E	確認されず	
ST3	C2	3.35	1.7	—	1間×2間	N10°W	確認されず	
ST4	A3・B3	4.45	2.1	—	1間×2間	N74°E	確認されず	

付表6 三枚橋遺跡出土土器観察表

図版 NO	遺物 NO	遺構名	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部位
								外面調整	内面調整	底部	
40	1	SB1	黒色土器	瓶	14.2	4	10.6	ミガキ	ミガキ	ナデ	口縁部～底部
40	2	SB2	黒色土器	坏A	13.6	5.4	4.1	ロクロナデ	ミガキ	糸切り	口縁部～底部
40	3	SB2	黒色土器	坏	15.6	IND	IND	ロクロナデ	ミガキ	ヘラ切り	口縁部～底部
40	4	SB2	土師器	甕B	22	IND	IND	ハケメ+横ナデ	ハケメ+ナデ	IND	口縁部～体部上半
40	5	SB2	土師器	甕B	23.8	IND	IND	ハケメ+ナデ	ナデ+ハケメ	IND	口縁部～体部上半
41	1	SB3	土師器	坏	12	—	5.9	ナデ	ナデ	ナデ	口縁部～底部
41	2	SB3	土師器	甕A	29.8	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部～体部上半
41	3	SB3	土師器	甕F	20.2	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	口縁部～体部下半
41	4	SB3	土師器	小型甕	IND	IND	IND	IND	ナデ	IND	体部上半～体部下半
41	5	SB3	土師器	甕C	IND	7	IND	ナデ	ナデ	IND	体部上半～底部
41	6	SB3	土師器	甕H	IND	IND	IND	ナデ	ナデ	IND	体部上半～体部下半
42	1	SB4	須恵器	坏A	15.2	6	4.95	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	口縁部～底部
42	2	SB4	須恵器	坏A	11.8	6.6	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	口縁部～底部
42	3	SB4	須恵器	坏A	13.8	5	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	口縁部～底部
42	4	SB4	須恵器	坏A	13.6	4.6	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	口縁部～底部
42	5	SB4	須恵器	坏B	8.4	6	5	ロクロナデ	ロクロナデ	IND	口縁部～底部
42	6	SB4	須恵器	高盤	20	13	8.1	ロクロナデ+ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ+ ケズリ	ナデ	口縁部～台部
42	7	SB4	土師器	小型甕A	9.8	6.4	10	ナデ	ナデ	木葉痕	口縁部～底部
42	8	SB4	土師器	甕B	20	IND	IND	ハケメ+ナデ	ナデ	IND	口縁部～体部上半
42	9	SB4	土師器	小型甕	IND	6	IND	IND	ナデ	ケズリ	体部下半～底部
42	10	SB4	須恵器	甕	IND	6	IND	タタキ	当て具痕+ナデ	ナデ	体部下半～底部
42	12	SB5	須恵器	坏蓋B	17.2	—	—	ロクロナデ+ ヘラケズリ	ロクロナデ	—	体部
42	13	SB5	須恵器	坏A	12.8	6.6	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
42	14	SB5	須恵器	坏A	12.8	6.6	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	口縁部～底部
42	15	SB5	須恵器	坏B	12.4	8.2	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	口縁部～底部
42	16	SB5	土師器	甕B	20.4	IND	IND	ハケメ+ナデ	ハケメ	IND	口縁部～体部上半
42	17	SB5	土師器	小型甕B	11.6	IND	IND	ケズリ+ナデ	ナデ	IND	口縁部～体部下半
43	1	検出面	弥生土器	甕	19.6	8	24.6	ナデ+襷描文	ナデ	ナデ	口縁部～底部

付表7 三枚橋遺跡出土土器製品観察表

図版 NO	遺物 NO	遺構名	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (kg)
42	11	SB4	砥石	泥質凝灰岩	6.85	3.02	1.52	45

発掘調査報告書抄録

ふりがな	へいせい20ねんどあづみのしまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ
書名	平成20年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	ハツ口遺跡・三枚橋遺跡
巻次	
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第3集
編著者名	土屋 和章
編集機関	安曇野市教育委員会
所在地	〒399-7102 長野県安曇野市明科中川手6824番地1 TEL0263-62-3001 (代表)
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やつくちい せき ハツ口遺跡	ながのけんあづみのし ほたか1386ばんちほか 長野県安曇野市穂高 1386番地 外	20220	穂高56	36° 18' 41"	137° 53' 36"	20080527 / 20080630	750㎡	集合住宅 建設
さんまいば しいせき 三枚橋遺跡	ながのけんあづみのし ほたか1766ばんち1ほ か 長野県安曇野市穂高 1766番地1 外	20220	穂高47	36° 19' 52"	137° 53' 30"	20080722 / 20080831	700㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ハツ口遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代 中世	竪穴建物跡 5棟 竪穴状遺構 1基 土坑・ビット・溝跡	弥生土器、須恵器、土師器、 鉄製品、石製品	石臼が埋納された土坑を調査。
三枚橋遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代	竪穴建物跡 5棟 掘立柱建物跡 4棟 土坑・ビット	弥生土器、須恵器、土師器、 鉄製品、石製品	入り口に階段状施設をもつ竪穴 建物跡を調査。

安曇野市の埋蔵文化財第3集

平成20年度
安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書
ハツ口遺跡・三枚橋遺跡

2010

発行 平成22年(2010)3月31日

安曇野市教育委員会

長野県安曇野市明科中川手6824番地1

電話0263-62-3001 (代表)

印刷 電算印刷株式会社